造に用ひらる。

茲に興味あるは各國の礦石採掘量とアルミニウムの製産額の比較なり。卽ち、

ボーキサイト	アルミニウム	ダルマチヤ	ノルウエー
採掘量順位	製造額順位	イストリヤ	瑞西
北米合衆國	北米合衆國	イギリス	フランス
フランス	獨逸	伊太利	イギリス

(H. Harassowitz—Aluminium—Lagerstätten. *Metall u. Erz, Juli, 1924.* 山田正實譯)

イギリスだより（一）

寺田貞次

昨年六月蒲英以來、倫敦に滯在約四ヶ月、Scotland の Edinburgh に學び、其の間 Glasgow 並に Aberdeen に遊び、歸途 Liverpool, Manchester, Oxford 並に Cambridge を巡歷、地學教室並に地學關係箇所を視察致しました、未だ獨、佛其他の視察を終へて居りませぬから比較研究の機を有しません、又地學研究の傾向とか、學說とか云ふ點に付きましては喋々するの任でありませんから、夫等には全然觸れませず、唯視察しました地學教室なり、地學に關する設備なりを御報告申し、英國に於ける地學の近況御推了の資に供し度いと存じます。

英國は周知の通り、新陸地の發見とか、探檢とか植民とか云ふ方面には早くから餘念なくやつて居ましたので、自然に地理に關する調査、研究は歐大陸諸國に劣らず行はれて居たのでありますけれども、寧ろ土地の新事實を紹介すると云ふ事が主であつた樣に考へられ、旅行記、探檢記の類は夥しく發表もされ出版もされて居ます。然し之を地學として研究すると云ふ段になりますと、何と申しても獨逸に一歩を讓らねばならないでありませう、從て地理に關する機關の如きも後れて居るのを免れませぬ、例へば地學協會の設立の如きも英國は獨逸に後れて居ました、もつとも英國側から申しますれば、地學の研究も早く行はれたもので Oxford 大學には早く Carpenter と云ふ人があ

つて、地學史上特筆すべき地學者であるとか、哲學者、經濟學者、地質學者等の中には早く地學に關する說を持て居た人も少くなかつたとは申しませうけれども、眞に地學として研究の盛になつたのは、矢張り最近の事で、倫敦の Royal Geographical Society が地理と教育上の目的として大學に設置する必要を認め、一八八六年其の盡力で、Oxford 並に Cambridge 兩大學に初めて地學講座を設置する樣になつた、爾來英國各地の大學にも之が設置を見る樣になり、從て地學の研究も盛になつた樣に考へられます、從て之れから御報告申す研究室も此の以後の設立で勿論新しいものではありますけれども、大抵は特別の建物を有して相當の設備が施されて居ます、それで先づ最初に倫敦の地學協會を御話申し、次に教育上の目的で發達した、Oxford, Cambridge 兩大學を觀察致し、進で英國内其の他の大學なり地學關係機關なりを順次御話申さうと思ひます。

(一) The Royal Geographical Society.

協會發行の The Royal Geographical Society(一九二四年版)に依りますと、英國が探檢や發見を開始しまして以來、地理的の事業は十九世紀の初め迄は何等規則的の組織もなかつたのでありましたが、一八三〇年に初めて協會の設立を見る樣になつたので、最初は會の名稱も異て居れば、所在地も變轉して居ましたのを、最近一九一二年頃現今の地、即ち Kensington gore, Kensington (ケンシントン) S.W. 7. に移り今の建物を觀る樣になつたので Gardens (ガーデンズ) に在る壯大な Albert Memorial の向ひ側で、Royal Albert Hall と云ふ大きなドーム形建物の東隣、倫敦大學本館の北に當て居ます、現今の President は The Right Hon. the Earl of Ronaldshay 氏、Secretary は Arthur R. Hinks 氏で、協會の目的に從て、地的智識の奬勵、普及を務め、發見又は探檢事業の補佐をなして居る、會員 Fellows は漸次增加、殊に大戰後は著しく增加して、現今五千を數ふる樣になつて居る、建物は赤い煉瓦造の風雅な田舍式の建築で、倫敦諸方に見る樣な宏壯なものでは無いけれども、設備よく整ひ、後庭の木立深く、綠草濃かに市の喧騷に似ず閑靜で落付のある建物である、三階建になつて居り、階下 (Ground floor) は陳列室、地圖室、會議室等で、玄關を入ると番人が嚴めしく控えて居る、然し協會は其の目的通り公開で、備付の訪問簿に署名さへすれば誰でも縱覽は自由である、最初の室は廣大で陳列室 (Museum) である美しく磨ける檜(Oak)の組床で、周壁には協會の賞牌受領者の肖像並に地學上興味ある浮彫を掲げ、室内には數個の硝子箱を備へて、地的發見者、探檢者等地學に關する史的人物の遺物が陳列されて居る、南極探檢家 Robert Falcon Scott の日記 (一九一一) だとか、Captain Amundsen が南極に殘した Sextant Telescope であるとか、Shackleton が南極の羅旅行に携帶した曆(一九〇八、一九〇九)、Captain Parry が一八二四年の北極探檢の際及び一八二六から二九年に至る世界一週航路發見の際用ゐた經線儀(chronometer)、一八二四年から二十五年に至る Captain Parry の探檢航海中、其の船員の食料に供し生命を維持した海鼠(ナマコ) (Tripe de Roche)。一八三九年から四十三年に至る南極地方探檢の際の Sir J. D. Hooker の使用した時針 Dr. Livingstone

が一八五九年 Nyasa 湖探檢中用ゐた物で、同リヴィングストーンが一八五五から五十六年に渡て Loanda から Quèlimane に至る旅行中に書た the Kwango 及 Kasai の地圖、同一八六一年にリヴィングストーンの最作にかゝる Nyasa 湖西岸圖、同リヴィングストーンの亞弗利加からの最後の書簡（Sir Henry Rawlinson に送た手紙で表紙に記してある、General Lord Rawlinson の寄贈）同亞弗利加旅行中使用のセキスタント及 Bost Compass. 中央亞弗利加 Bangweulu 湖畔、リヴィングストーン墓標の樹幹（墓銘を刻す）（一九新〇〇年墓標建設に際し伐り倒したもの）Sandwich Islands 中の Karakakua に在る Captain Cook の墓標の寫眞及び石摺（Geographical Journal 1980 所載）Sir John Ross の Roughobservation Book 及び Dr. Keith Johnston が遺つた最初の Physical globe 等注意を引くものが多くあります。其の後の室は後庭に面した廣い室で地圖室になつて居り、室の中央及び周壁には高さ四尺許で抽出を備へて居る、テーブル形の地圖箱を置き、寫集せる地圖を藏して居り、中央の地圖箱の上には新刊の地圖帖又は寫眞帖、寫眞等を置き、室の側側に在る地圖箱の上には古代より近時に至る各種の地球儀を並べ。

world according to leonardo davinci 1515, by E. C. Ravenstein. 1895,

world according to eratosthenes 220 B.C. (by 同上)
〃 〃 to Ptolemy, 159. A. D. (〃 〃)
〃 〃 to Behaim, 1492 (〃 〃)
〃 〃 to Ruysch, 1508 (〃 〃)
〃 〃 to Schöner, 1515 (〃 〃)
〃 〃 to oronce fine, 1531 (〃 〃)
〃 〃 to Mercator. 1569 (〃 〃)

Terrestrial globe by R. Cushee, 1730, (Lent by the earl of Lichfield)

周壁で地圖箱の上には、一六〇八年 Amsterdam 製の Mercator's Prajection（メルカトル圖法）に依れる世界圖（by Hondius）（Geographical Journal Sept. 1919 參照）並に一六四〇年から一六六〇年の間に成れる Joan Blaeu の世界圖（球兩半圖）を始め、地理に關係ある諸名家の油繪像をかゝけて居る、其の中には海軍服姿で左手に劍を握れる Lieut. James Ross（一八三三）の肖像を初め、フロックの姿で南亞の景色を背景として立てる David Livingstone (1813-1873) 白色の胴衣に紺の上衣を着し、手に書物をさゝくて腰かけの姿の Capt. James Cook, R.N. (1728-1779), 白襯、カーキー色外套を着し、右手に杖をつき、凛々しき姿の Henry Mortoon Stanley (painted in Cairo 1890, by Miss E. M. Merrick), 海軍服を着し腕を組み溫厚なる顏付の Capt. Robert Falcon Scott, C. V. O., R. N. (+1912, Died on the Barrier March returning from the South Pole), よく肥た丸顏の凛々しい、前額の禿た Sir John Franklin (by George Wallis) アビシニア旅行家の James Bruce (by Weickert) 等が眼につく、其の左側の室は Map Store で室の中央には地圖を入れる抽出付の地圖箱を置き、周壁には天井に達する書棚を備へて各種の地圖を網羅し、其カタログも備へられて居り、傍に助手が机を並べて整理に從事して居る、前述の Map room の右側は會議室（Council room）で會議用の立派

なテーブル、椅子を備へ、周壁には地學關係者の寫眞を掲げ、Capt. R. L. Burton の小寫眞迄集められて居り、又協會が總裁として仰ぐ、御眞影をかゞけて居る、其創立者たる H. M. King William IV (1830-37) を始め、H. M. King Edward VII (1902. Patron 1901-10), H. M. Queen Victoria (1897) (Patron 1837-1901)が夫である、御眞影には御宸署迄ついて居るには驚いた、其隣りに小さい室が尙一つ在る、Photograph room で、協會蒐集の寫眞中より選擇して、各種の寫眞を陳列して居る、自分の觀た時は一九二二年及び二四年の探檢にかゝる Mount Everest の寫眞や水彩畫を陳列して居た、かうして新しい蒐集品を時々取りかへ陳列する事は、縱覽者に取て有益なやり方と申してよろしい、次に二階を縱覽する。

First Floor (二階) は圖書室と閱覽室で、事務室、圖書館長室、Fellows' Library, 閱覽室 (Reading Room) に分れ、更に Tea Room, Writing Room 並に Smoking Room も備へられて居る、各室と云ひ、廊下と云ひ到る處、天井に達する迄の書棚が並べられ、內外の圖書を以て充滿されて居る、部類別に整理し殊に各國別部の圖書は夥しい數に達して居る、日本の部は圖書事務室前の廊下に在る、比較的少い樣な氣がします、もつとも日本字の書物は一册も並べてない夫等は倉庫に別置して居ます東京地學協會雜誌は裏刷に英文で論題が記してあるので、利用はされて居ますけれども尙別置に屬するを免れないで居ます、其方から見ますと震災豫防調査會の報文は英文で出來て居るので製本迄して大切に保存されて居ます、事務室にはカード箱を備へ、部門別にして整理して居る、單に書名を分類する許でなく、各地學關係雜誌中の重要論文をも分類して保存して居る、或る題目に關して調査の要ある場合には至極便利で、時々カタログとして出版される、昨年出版されたのはかくして蒐集したものである、此の分類には東京地學雜誌の論文も裏面の英文題目の御陸で蒐錄されて居る、雜誌に外國文字で論題を記し置くと云ふ事は國內では餘り有益にも考へられないけれどもいやしくも世界の學界に貢獻する爲めには是非共必要な事で將來の專門雜誌は面倒でも少くとも之れだけは務めなければならぬ事と思ふた。

此の事務室から後庭に面した側に、館長室、Fellow Library の狹い室をへだてゝ、Reading Room が在る、廣い立派な室で周壁は書棚を以て充たし、中央に二脚の長大な卓子を置き、庭に面した窓側にはテーブル三個を置き、傍には Sofa. や安樂椅子數個も準備してある、此室備付の圖書は一般の調査に必要な百科全書、辭書、地圖、雜誌類を初め旅行案內例へばベデカの案內の類を網羅して居り、一卓子上には新版の各國地學雜誌を並べ、一卓子上には新版地學圖書を陳列し、紹介の便に供して居る、實に完全な研究室と申してよろしい。此 Reading Room と相對し、廊下をへだてゝ向ふ側は Smoking Room である。街路に面した室で、見はらしはないけれども室は Reading Room に次いで廣く右側に爐を備へ、安樂椅子の立派なのを數個備へ立派な机迄も準備してある、周壁には矢張り英國流とも申すべきか、肖像畫などが處せまき迄掲げてある、此の室のは主に古

畫に屬するもので、爐の上にかゝげてある Spanish Armada を破つた記念に畫かれた Queen Elizabeth from the portrait by Mr. Cheeraedis in the collection of the Duke of Bedford at Woburn Abbey) の像を初め、地球儀を傍にして立て居る Sabastian Cabot や James Cook, Prince Henry (the Navigator), the Capt. Cook of Death, Capt. James King, Capt. William Minors (1593-1667), Vasco de Gama, Amerigo Vespucci, Citio de la Angostura (1764), などが注意を引く、其の他、一八五八年の建造で、一八七二年から七十六年迄特種な科學的研究に使用された、H. M. S. "Challenger" 號の畫とか、一八四八年の Hongkong の景とかが眼についた、小さい畫が多いけれども刊の古い處は奥ゆかしい、尙廊下には書棚以外に一九〇四年の探檢にかゝる西藏 Lhasa の景とか、雄大な Himalaya の雪峰の寫眞、Punjab の Chamba State にある Marimais (1888) の大寫眞、一九二二年の探檢にかゝる Mount Everest の寫眞數葉がかゝげられ、二階に上る階段の側には北極探檢家 Fridtjof Nansen, の銅製胸像、Joseph Thomson (1858-94) の白色胸像が置かれ、壁には Drea Wilson (Scott's First Expedition) の麗はしい水彩畫の地學的風景畫が幾枚も掲げてある、寧ろ俗な樣な氣はするけれども、又見處もないではない、殊に西藏の大きな景色に至つては英國の此の方面に對する注意をおこたらない事を察するに餘があり、自分は Edinburgh 滯在中には當地、地學協會 (Scottisch geographical Society) の開催にかゝる例會に其都度出席しましたが、西藏探檢談などは大に衆目を引く樣に思はれました。

三階 Second Floor も廊下を初め多くは圖書を以て充滿され、南亞米利加諸國に關する書物が此處に置かれて居ます、其他は植民地に關する事務室なり製圖室などもある樣でしたが、詳しくは觀ませなんだ。要するに、英國は何を申しても植民地を多くもつて居る國だけに、之が調査研究は決して絶えない、從て之れだけの設備をも要するのではありませうけれども、其の室内の設備を云ひ、蒐集せる、圖書、地圖の豐富なる點を云ひ、自分共の貧弱な書齋から初めて來た小生共には非常に完備せる研究室の感にうたれました、然も之が全然公開で自分も圖書館員の厚意で、滯在中常に之を利用しましたが、普通の圖書館と異つて、閲覽者殆ど少く、此の立派な氣持のよい、完備した研究室を自分等の爲めに特に設備してくれた樣な心持で、圖書の出入に至る迄全く自由に、朝の十時から夕の六時迄利用する事が出來ました、此の公開を云ふ事は紳士國たる英國の慣習とは云ひながら、誠に地的知識の普及と云ふ協會の目的に適し、便利な事と云はねばなりませぬ、日本にも地學協會は一ヶ所在つたが遺憾な事には大震災で燒失してしまつた、然し將來に於ては東京に一ヶ所と云はず英國の樣に各地に此の種の自由な地學研究室があつてほしいと熟々感ぜざるを得ませんでした。